

お見合い代行のお相手は、

我が社のハイスぺCEOでした。

広いベッドの上でもつれ合いながら服を剥ぎ取られ、深いキスをする度に、ピンと張られていたシーツに波紋のような皺が出来ていく。

「…綺麗だよ。とても綺麗だ」

綺麗なのは貴方の方だと言いたくなるほど端正な顔立ちに、ジムに通っているのだろうか、細すぎず引き締まった彫刻のような美しい体。

そんな彼に、まつ毛が触れるほど近くで、キスの合間に教え込むように囁かれると、私の心臓はドキンと大きく音を立てる。

けれど壁際を足元から天井に向かって照らす間接照明と、僅かな気配にすら揺らぐキャンドルの淡い光に晒された自分の肌が目がいくと、それが私を急に現実に戻す。

「ごめんなさい、私……」

薄くなった醜い傷痕に彼の指が触れた瞬間、ずるりと記憶が引き摺り出され、ギョツと目を閉じて無意識に身を硬くしてしまう。

「大丈夫だよ」

行き場を失ってシーツを掴んでいた私の手を、彼の大きな手は優しく拾い上げた。指を絡めつつ口元に引き寄せて、冷たくなった指先にそっとキスをする。

「緊張してるのかな」

彼はそう呟いて、手を握ったまま指の背で私の頬を優しく撫でる。

（緊張、してないと言えば嘘になる）

それでも私は他人の肌の温もりを知らない訳じゃない。

だけど愛なんてものが、この世にあるとは思っていないかった。いや、そんなものは無いと信じて疑わなかった。

——親に愛されなかった過去。

だから私は、私を否定しながらしか生きてこれなかった。

「震えは治まったみたいだね」

それなのにこの腕の中は酷く安心する。生きていていいのだと、私を認めて良いのだと、この人が与えてくれる温もりが愛なのだろうと、私はすっかり心すらも委ね始めている。

「ごめんなさい」

そして思い知った。

愛情欲しさに、易々と体を明け渡してしまった浅ましい過去に、どれだけでももらしい理由をつけたところで、純潔には戻れない。

「ごめんなさい」

「どうして謝るの」

だからこんなにも優しい腕に抱かれて、初めて自分の愚かさに気が付いて、恥ずかしさで消え入りたくなった。

「私、私は……」

「怖いのなら、ただ抱き締めて眠ろうか」

「そうじゃないんです。ただ、私は貴方が思ってるような女じゃないから」

「君が感じることを、そうじゃないなんて軽々しく否定は出来ないけど、君がそう感じて辛いなら、俺は君に少しでも好きになってもらえたってことかな」

「それは」

「俺は君が君だから好きなんだよ」

囁かれる声は優しく、どこまでも甘く、今になって色んな理由をつけて自分を軽く扱ってきたことを後悔する。

「あの、私……」

「ん？」

「私、貴方が初めてじゃ」

「俺のベッドで、その話するの」

「ごめんなさい……」

静かな怒りを孕んだ低い声にビクツツとして、咄嗟に謝罪を口にしようとした私の声に被せるよう

に、彼は気まずそうに苦笑する。

「違うよ。これただのヤキモチだから」

「え」

「俺は嫉妬でおかしくなるくらい、君のことが大好きなんだよ」

真剣な眼差しが私を射貫く。彼はこんな私を本気で好きでいてくれる。

怒って見えたのは、私にそこまで執着しているからなのだと分かった途端、胸の奥が熱くなって羞恥と劣情が一気に大きくなっていく。

「君のことが好きだよ」

見つめ合う瞳が、私の心の奥底に語りかけるように静かに眩くと、ゆつくりと彼の唇が私の唇に重なって、固くなった体から徐々に力が抜けていく。

「好きだよ、沙矢」

ただ名前を呼ばただけなのに、どうしてこんなにも泣きそうになるくらい、胸の奥を締め付けられるように強烈に響くんだろうか。

「沙矢」

まるで生まれて初めてキスをするみたいに、ドキドキ心臓の音がうるさい。こんなにも優しい彼に抱かれる自分を、いい加減、自分自身で愛して受け入れる覚悟を決める。

「好き……です、貴方が好きです」

「うん。俺も沙矢が好きだよ」

キスは唇から離れて首筋に移動して、されるがままに顎を少し上げ、彼に身を任せる。

彼とこんな風に過ごす時が来るなんて、出会った経緯を思えば、あり得ないことだったのに。



小さな頃、母が連れていってくれるお芝居やミュージカルを観るのが大好きで、いつしかその中で私以外の存在になりたいと思うようになった。

最初は煌びやかな世界への憧れが強かったけれど、いつからか、きっと舞台になら自分の居場所があるって信じていたんだと思う。

小学校の学芸会は主役じゃなくても全力で取り組んだし、中学も演劇部で必死に頑張って、高校は夜学だったけど同好会で演劇を続け、賞を取ったりもした。

だからこそ舞台に立てば、自分はそこにいていいんだという安心感が芽生えた。

そして奨学金で進学した大学では、サークルじゃなくて外部の劇団に入って、時間を作り色んなワークシヨップにだって参加した。

だけど現実是非情で、どんなに頑張っても生まれ持った見た目は華やかにならないし、舞台映えするほど背も伸びない。また、頑張れば頑張るほど嘘臭い芝居だと指摘されるようになっていった。それは私自身に、中身がないことが関係してるのかもしれない。

鈍臭くて不器用で大根役者の自覚はあったので、二年前、二十六になってようやく夢に区切りを

つけるつもりで今の会社に契約社員で就職した。

しかし演じることは私の全てで、それを失うのは正直怖くて堪らなかつた。そしてやつぱり芝居を諦めきれなくて、実は小遣い稼ぎを兼ねた副業をしている。

ここはそんな私、常盤沙矢に、ささやかな夢を見させてくれる癒やしの場所だ。

「沙矢、お前再来週の土曜日空いてるか」

都内某所のビルの二階、担当業務のブロックごとにデスクが並ぶオフィスで、斜め隣から急に声をかけられる。

長めの前髪が目元を隠しているものの、ハッと息を呑むほど美しい顔立ちの男性が、こちらを見ずにパソコンと睨めっこしたままキーボードを叩いている。

「あの。それって、本気で私に週末の予定があるかとも思っていてませんかよね」

「はは、確かにな。思っていない。空いてると思ってる」

緩くパーマがかかった髪と、黒縁メガネがトレードマークの社長が可笑しそうに笑う。

「失礼だなあ、もう。笑うのは禁止ですってば」

この笑顔にクラッとさせられた女性が何人いることだろうか。

「悪かつたよ。いや、謝るのも変か」

「本当に失礼ですね、もういいです。それより土曜日ってことは、また前川さんのお孫さんとしてお見舞いに行くんでしょうか」

「沙矢、お前何年この仕事してる。軽々しく仕事内容や顧客の名前を出すな」

「すみません。汰一さんと二人だと気が緩んじゃって」

層が関係ないここでは、祝日の今日も事務仕事が溜まっていた。出勤してる他のみんなは、ランチタイムでこの時間は席を外している。

「まあな、俺にとってもお前は娘みたいなもんだよ。でも仕事は仕事だ。少しの油断が大きな危険を生むんだぞ。気を付けるよ」

そう答える香川汰一さんは、私が所属していた演劇集団〈プリズムスクール〉の元主宰であり、この芸能プロダクション、〈オフィス・克蘭ベリイ〉の社長を務める四十六歳の独身イケおじ。

プライベートをあまり明かしたがないのは、バツがいくつもあるからだとか、女性にまつわる噂が絶えないけれど、本当の理由は別にあることを私は知っている。

「よし。沙矢、詳細を今メールした。すぐ打ち合わせするぞ」

「分かりました」

汰一さんのデスクはすぐそばなのに、業務内容がメールで送られてくるのには理由がある。

舞台俳優や声優、ナレーターが多く所属する芸能プロダクション〈オフィス・克蘭ベリイ〉にはもう一つ『人材レンタル』業務が存在する。私の副業がそれだ。

汰一さんからのメールをチェックしていると、昼休みも終わりに近付き、ランチに出ていた社員たちがゾロゾロと事務所に戻ってきて、フロアが一気に賑やかになる。

「沙矢ちゃんお昼どうすんの」

「ちよっとまだバタバタしてて、これから打ち合わせが入ってますね」

広げた書類をファイルに戻しながら、戻ってきた他の社員と雑談しつつ、冷えてしまったコーヒーを飲み干す。

「もう、社長はすぐそうやって沙矢ちゃんをこき使うんだから」

「大丈夫ですよ。埋め合わせにエグいくらい高いお肉奢ちぎつてもらいますから」

「そうだよ、そうしなよ」

「えー、それ俺も便乗したい」

「分かる。私も」

「ははは、じゃあ今度みんなにご飯奢むぎつてくれるように言っときます」

その辺りで会話を切り上げると、私は再び汰一さんからのメールに目を通して、内容に戸惑いながらも、手帳とノートパソコンを抱えて会議室に移動した。

「失礼します。すみません、遅くなりました」

「いいよ。あいつら戻ってきたんだろ」

「みんなで汰一さんにご飯奢むぎつてもらおう話で盛り上がりました」

「なんだそれ」

可笑しそうに笑いながらも視線をノートパソコンに移すと、汰一さんは表情をがらりと変えて、真剣な視線を私に向ける。

「さて、今回は一風変わった依頼だが、内容は把握したな」

ブラインドを下げると言う汰一さんは、炭酸水の入ったペットボトルをこちらに差し出して少し

難しい顔をする。

それはそうだろう、私だって困惑している。

「はい。だけど私で大丈夫なのか不安です」

「どうした、沙矢にしては珍しく弱気だな」

「だってこんなの、やっぱり無理があると言うか、別人なのがすぐにバレちゃいそうじゃないですか」

「弱気になるな。そのために打ち合わせしに、依頼人がこれから来ることになってる」

スマホを覗き込んで時間を確認すると、汰一さんがそう心配するなど苦笑いを浮かべる。

「沙矢なら大丈夫だから任せるんだ」

「でもお見合いの代行だなんて」

そう、今回の依頼はお見合いの替え玉だ。

「オフィス・クランベリー」が請け負う『人材レンタル』は、舞台上役を演じる訳じゃなく、私たちとなんら変わらない、日々を生きる一般の人を演じる。

私の副業は、その『人材レンタル』部門で他人を演じ切ること。

「まあな、確かに見合いの替え玉なんて、普通じゃあり得ない話だけだな」

「ですよ。お見合い写真とか、釣書とか、事前にやり取りがありそうなものなのに」

「まあ、お客様の事情は様々だ。という訳で、悪いけど昼飯は来客が終わってからにしてくれ」

「はい。分かりました」

色々と不安はあるけれど、本格的な役者活動をやめた私が演じることが出来るチャンスはそう多くない。

そうして汰一さんと雑談を交えながら事前に把握出来ている内容を共有していると、約束の午後一時を二十分ほど過ぎてから、その女性はやって来た。

「ごめんなさい。初めて来るのでタクシーに乗ったら、この辺り入り組んで道に迷ってしまっただけ」

さして反省している様子もなく女性はそう言った。

（あれ？ 地下鉄の駅から二分と離れてないし、めちゃくちゃ分かりやすい場所なのに）

女性の受け答えに少し違和感を覚えたけれど、汰一さんが発した声で我に返る。

「そうでしたか。それは大変でしたね」

汰一さんが笑顔を向ける中、来客用のお茶出しをして様子を見る。見た目で人を判断してはいけないが、かなり派手好きそうな女性だ。

「ええ。遅れてしまってごめんなさいね」

「構いませぬよ。では早速ですが松永様、今回のご依頼を受けるに当たって、詳しい話をお伺いしてよろしいですか」

汰一さんの一声で、私はトレイをサイドテーブルに置くと断りを入れて依頼人、松永美沙希さんの向かいに腰かけた。

「ええ、お話しさせていただきます」

そして彼女の身の上話を聞く。

今から十年前、街中で持病の発作を起こしたお年寄りを助けた女性、松永菜々子さんは、夫を早くに亡くし、当時中学生の一人娘を抱えたシングルマザーだった。

倒れたお年寄り、資産家の畠中悠三氏は一命を取り留め、何かしらの形でお礼がしたいと、菜々子さんの娘であり、今回の依頼人である美沙希さんの学費を援助。

しかしながら菜々子さんが病を患い倒れてしまい、数年の闘病の末にこの春亡くなってしまったのだという。

そういつた経緯があつて、社会人になり自立しているとはいえ天涯孤独となつてしまった美沙希さんを案じた畠中氏から、お節介とも取れる縁談が持ちかけられたそうだ。

「畠中のおじいちゃまには本当にお世話になつたんですけど……」

そう言つて困惑した顔をするのは、確かに無理もないかもしれない。

足長おじさんという有名な物語があるが、松永さんのこの話はそれよりも更に上をいく印象だ。

「これは以前も伺いましたが、本当に畠中様とはご面識がないんですか」

汰一さんが尋ねているのは、大学を卒業するまで学費の援助を受けていたのに、美沙希さんが畠中氏と会つたことすらないという微妙な関係性についてだ。

「……ええ。お手紙でお礼状を出したことは何度もあります、お母さんに命を救われて好きでやつてることだから、お礼も必要ないと言われたりもしました」

美沙希さんは困惑気味に口元に手を当てる。

「そんな畠中氏から、ご心配からなのでしょうが、お母様が亡くなったのを切っかけに、縁談を持ち込まれたとのことですが、普通にお断りになることは出来ないのでしょうか」

汰一さんがそう言うのはもつともだ。

たとえ命の恩人の娘とはいえ、学費の援助だけでもいきすぎている気がするのに、結婚相手までも押し付けるのは恩返しを越えている。

「何度もお断りしたんです。だけど見合い相手と会うだけ会ってみて欲しいって。会ってみて嫌なら断って構わないからって、どうしても取り合ってくれなくて」

美沙希さんは疲れ切った顔でうつすらと涙を浮かべてしまった。

慌ててハンカチを差し出すと、情けない話でごめんなさいと苦笑して溢れそうになった涙を拭う。「会って断っても良いなら、なぜお会いにならないんでしょうか」

「方が一にでも先方に気に入られてしまったら、お断りするのが心苦しくなるじゃないですか」

「なるほど、そういう理由ですね」

汰一さんは聞き取った内容を、ざっくりとメモに書き残していく。

「ところでお見合いに関してですが、お相手の写真や釣書どころか、お名前すら分からないのほどうしてですか」

「それは……断り続けましたし、その手の書類を一切受け取らなかったからです」

その言葉に、また少し違和感を覚えるけど、それよりも美沙希さんの置かれている立場を思うと同情する気持ちが膨らんでいく。

「なるほど。最初から松永様にそのお話を受ける気はないので、お相手の素性がよく分からないということですね」

汰一さんが最終確認のように美沙希さんを見つめると、彼女は気まずそうに表情を暗くして小さく頷いた。

「ご事情は把握しました。それでは今回松永様に代わって、松永様としてその場に伺うスタッフと詳細の確認を始めさせていただきます」

汰一さんがそう切り出して、ようやく私は美沙希さんと、彼女のプライベートについての確認を開始した。

普段よく行く場所だとか、好きな本やドラマ、ファッションはどんな雑誌を参考にしているか、ネイルに拘りはあるか。

普段の仕事内容や交友関係、どんな些細なことも聞き逃さないように細かくメモを取る。そうして彼女になりきってお見合いの場に向かう。

これが今、私が演じ続けることが出来る唯一の舞台なのだ。

◆◆◆

◆◆◆

◆◆◆

◆◆◆

◆◆◆

あるけど、出来るだけナチュラルなメイクを心がけたつもりだ。

ネイルはあえてピンクが強いネオンカラーに、白のラインを入れて少しだけ上品さをプラス。やや厚手のオフホワイトのシアーに、ブリックピンクのツイードジャケットを羽織り、甘さを抑えるためにボトムはかっちりめの黒のワイドパンツ。

そして足元には黒いスクエアトゥのパンプスを合わせて、髪はハーフアップで毛先を巻いたウィッグを被っている。

「さて。気を引き締めてかかろうか」

パウダールームで一通り身なりをチェックし、前髪の崩れを直してからロビーに出る。

指定されたお見合い会場であるシャスタホテル東京ベイは、近年アフタヌーンティーで注目され、海を一望出来るレストランも魅力的で、デートスポットとしても有名だ。

土曜日とあって人出の多い一階のカフェラウンジを見つめていると、私と同じように『お見合い』が目的らしい人をちらほら見かけて、苦笑しながら場所を移動する。

事前の情報が乏しく相手が全く分からないのは凄く困る。ハンドバッグからこの日のために用意したスマホを取り出して、お見合い相手の山王さんという男性に電話をかけた。

一コール、二コール。

ところが呼び出し音は虚しく鳴り続き、何度かけても相手が電話に出る様子はない。

「困ったな」

呟いて次の対策を練ろうとしていると、マナーモードにし忘れていた私用のスマホが鳴った。慌

ててバッグから取り出した画面には非通知の文字が表示されている。

(……え)

不意に襲ってくる恐怖で体が強張り、スマホを眺めていると、通りすがりのカップルが、二台のスマホを使い分けている私を不思議そうに見ていることに気が付いてハッと我に返る。

非通知の着信に気味の悪さを感じつつも、今は仕事に集中しないといけない。

慌てて私用のスマホを機内モードにしてバッグの底の方にしまうと、もう一度仕事用のスマホから山王さんの番号に電話をかけた。

一コール、二コール、三コール。

もう約束の時間だというのに、相変わらず山王さんが電話に出る気配はない。

(参ったな。どうしようかな)

電話を切って考えあぐねていると、今度は電話を切ったばかりのスマホに着信があり、全く知らない番号が表示された。

このスマホは依頼人と打ち合わせて、今日のために用意した電話番号だから、ここは躊躇わずに出た方がいいかもしれない。

「はい。もしもし」

とりあえず鳴り止まないスマホをタップして電話に出ると、心地のいい、けれどどこか冷淡な声が聞こえてきた。

『突然のお電話失礼いたします。松永美沙希さんの携帯電話でお間違いないですか』

美沙希さん宛の電話ということは、もしかしてこの人は山王さんなのだろうか。

事前に確認している番号と違うのが気になるけど、美沙希さん宛なので、探るような気持ちで応対する。

「はい。松永の携帯です」

『こんにちは。本日、山王に代わって畠中さんのご紹介で、ご挨拶をさせていただくカジミネと申します』

どういふことだろうか、当日になって見合い相手の変更されたということだろうか。

会話を進めると、電話の相手はどうかやら美沙希さんがお世話になった畠中氏からの紹介で間違いないらしい。

「そうだったんですね。存じ上げずに大変失礼いたしました」

『構いませぬよ。その辺りの詳細は会ってお話しします。もうホテルにはお見えですか』

話が複雑になってしまったが、とにかく会わないことには話が進まない。

「ええ、一階のカフェラウンジの手前にいます。ロビーの端に電話のブースがあるのはお分かりになりますか」

『分かります。でしたら私の名前でカフェラウンジに入って待っていてください。少し道が混んでいたで、今駐車場に車を停めたところなもので』

「そうでしたか。ではお急ぎにならず、気を付けていらしてください。お待ちしております」

電話を切ると、そのままカフェラウンジに向かって、言われた通りにカジミネさんの名前で待ち

合わせだと伝えて席に着く。

ホテルの駐車場ならば、あと十分ほどでこの場に本人が現れるだろう。

見合い相手が山王さんではなくカジミネさんになった理由は分からないし、どんな人なのかも不明だが、とにかく彼が来る前に見合い相手が替わったことを汰一さんに報告しておく。

メールを打ち終わってハンドバッグにスマホをしまうと、松永さんですかと、電話越しよりも更に冷淡な声が背後から聞こえて慌てて立ち上がる。

「初めまして。松永美沙希と申します」

「こんにちは。改めまして、畠中さんからお話をいただいたカジミネと言います。今日はお時間を割きいてくださってありがとうございます。どうぞ座ってください」

「はい、失礼します」

お淑とやかな笑みを浮かべて、相手の顔をようやくはっきりと見つめる。

すらりとしたモデル顔負けの百九十センチ以上ありそうな長身と、短く整えられた明るい栗色の髪、何よりその整いすぎた小ぶりの顔には嫌と言うほど見覚えがあった。

（なんでこんなところに……）

カジミネという珍しい苗字なのに、どうして気が付かなかったのだろう。

私の記憶が確かなら、いや、視力が極端に落ちていなければこの顔を見間違えるはずがない。

「どうかなさいましたか」

動揺して固まったことに気付いたのか、カジミネさんはソファーに腰かけた瞬間に気遣うそぶり

を見せる。

「ごめんなさい。随分背が高くっていらっしやるので、つい見入ってしまったんです。不躰ぶしつけでしたね」

「ああ、そうでしたか。どうかお気になさらず」

さして気に留めた様子はなく、飲み物を頼みましようかとメニューを確認するカジミネさんの顔を再び見て確信する。

（やっぱり、間違いない）

だけど私は心の準備が出来ていない。だって彼は、私が勤務する会社の人間だからだ。

目の前でその長すぎる脚を組んで座っているだけなのに、醸かし出される華やかな空気は明らかに異質で、良くも悪くも人の目を引く。

梶峰昇かじみねのぼる。今や経済誌から女性向けファッション誌にまで特集が組まれるほどの有名人。

彼が有名なのは、ブライダル関連を一手に取り扱い、自社が経営するドレスショップ、結婚式場やレストランを全国に十四箇所、それに加えて関東を中心に結婚相談所を八箇所展開する、ヘシャオンス・ラ・マリエグループヘシャオンス・ラ・マリエグループの若き執行役員だからだ。

元世界的モデルという経歴まで持つ三十三歳の彼には、その若さと華やかな経歴、人を惹きつける外見から、広告塔として取材のオファーが後を絶たない。

そして何より梶峰さんは、私が本職で契約社員として勤めるヘシャオンス・ラ・マリエグループヘシャオンス・ラ・マリエグループの傘下さんか、ヘイトワールブライズヘイトワールブライズのCEOだ。

いくら契約社員とはいえ、社員数も少なくフレンドリーな社風なので、私の顔を知られている可能性は高い。

いつバレてしまうのかと、綱渡りをしているようで生きた心地がしないが、これも私の仕事だ。ここでバレてしまう訳にはいかないので気を引き締める。

「早速お伺いしたいのですが、本日はどうして山王さんではなく、梶峰さんが見えになったのでしょうか」

運ばれてきた紅茶の味もいまいち分からないほど動揺しているが、それはおくびにも出さずに静かな動作でティーカップをテーブルに置く。

「端的に言えば、そぐわない理由が見つかったからだそうです。山王は未婚で離婚歴もありませんが、方々ほうほうに認知してる子どもがいるらしいので」

とんでもない理由に、うっかり素で驚いた声を出しそうになるが、なんとか堪たえて淑しとやかな表情を作ると、目の前で呆れますよねと呟つぶく梶峰さんに答える。

「そうでしたのね。畠中のおじいさまは、お調べになるまでご存じなかったということですか」

「だから私に白羽の矢が立った訳です」
なんでもないことのようにそう言つてのけると、梶峰さんは背もたれに身を預けるようにして脚を組み直す。

こうして見ると、見合いの席で脚を組むのはいかがなものかと、梶峰さんに対する印象が変わる。もしかしなくても、先方もこの見合いには乗り気ではないのではないだろうか、邪推したくな

るほど不躰^{ふぶた}で横柄だ。

「失礼ですけど、畠中のおじいさまとはどういったご関係ですか」

「竹馬の友の孫というところですかね。身内みたいなものです」

男性にしては細く白い指が優雅にティーカップを持って口元に運ぶ仕草は、自然なのに洗練されていて思わず見惚^{みと}れてしまう。

しかしすぐに我に返って、そんなに近い間柄なら、なぜ断らないのか疑問に思う。

「随分と急なお話で驚かれたではありませんか。どうしてお断りにならなかったんですか」

「畠中さんには恩義があるんです。今日のことは、会った上で断って良いからと頭を下げられたのよ」

貴方も同じような事情ではないのかとばかりに、思いもしないタイミングで鋭い視線を向けられて、差し支えない程度に苦笑いを浮かべて咄嗟^{とつさ}に誤魔化す。

「そうですか。私もお恩がありますし、同じように言われてこちらに伺いました」

どこまでこちらの事情を分かっているのか、あるいは畠中さんの強引な性格から憶測して言っているのか。判断が難しいところだが、当たり障りない程度に答えておく。

「なら話は早いですね」

短い言葉に、ようやく緊張による体の強張りが解^ほれる。

「そうですね」

双方にその気がないということで、お見合いはここでお開き。顔合わせは済ませたのだから畠中

氏の顔も立つ。

だけど安堵しきっていた私の耳に、信じがたい言葉が飛び込んできた。

「申し訳ないが、身代わりを寄越すような恩知らずの相手をする気はないんでね。それ以前に彼女は人としてどうかしてる。松永美沙希さんにはお断りの旨^{むね}お伝えください」

「……え」

「畠中さんは孫か、あるいはそれ以上に大切に思っているようだが、事前に松永さんについて調べさせてもらったんです」

「それはどういう」

「それは貴方自身がよくご存じなのは。〈オフィス・クランベリー〉所属の陣野真弓^{じんのみゆみ}さん」

陣野真弓は大根役者の私の芸名。それを口にしながら再び鋭い眼差しを向けられて、もうさすがに返す言葉がなくて黙り込んでしまった。

「二十四歳を演じるには無理があるんじゃないかな」

「なっ」

さらっと年増とバカにされたが、そんなことよりも、私が『人材レンタル』で別人になりましているのがバれている。これはもうミッション失敗どころの騒ぎじゃない。

(完全に詰んだ)

何も考えられなくて呆然とする私に、梶峰さんは少し興味深そうに片眉を上げると、知らないよだからと松永美沙希さんの話を始めた。

正直なところ、作り話ではないだろうかと疑いたくなるくらい、事務所にやって来て事情を話してくれた依頼人とは様子が異なる話に動揺を隠せない。

いや、それでも確かに説明のつかない違和感があった。

梶峰さんは駄目押しするように、ホストクラブだろう場所で豪遊して高笑いしている依頼人の写真を私に突きつけた。

「依頼を受ける前に、きちんと身辺調査するべきじゃないのか」

梶峰さんはそう言い残すと、こちらが身代わりを引き受けた時点で、そこまでは期待してなかったと吐き捨て、颯爽とカフェラウンジから出ていった。

（参ったな。お見合いは破談に出来たけど、依頼の目的と違うもんね）

大きく溜め息を吐き出すと、私もようやくカフェラウンジを出て汰一さんに連絡を取る。

そしてホテルを出て近くの海浜公園に移動し、今日のことを反省しながら頭を冷やす。

『人材レンタル』は特殊な仕事で、ケースにもよるけれど、基本的には別人を演じていることが露見してはいけない。

なのに梶峰さんは、私が雇われた役者であることを把握していた。

（こんなの、情けない茶番じゃない）

やっぱり私は大根役者で、最も簡単に別人であることがバレてしまった。

幸か不幸か、私が常盤沙矢であることはバレてはいないようだけど、これだって時間の問題かもしれない。

「はあ……」

やるせなさで、必要以上に情けない溜め息が漏れる。

「沙矢！」

そんな時、休憩スペースのベンチに座り込んで項垂れていた私に、汰一さんが慌てて駆け寄ってきた。

「ああ、汰一さん。お疲れ様です」

「お疲れ。それよりどういうことなんだ」

「どうもこうも、メールで報告した通りです」

依頼人の松永美沙希さんの替え玉だと先方にバレていたこと、そして私が「オフィス・克蘭ベリイ」に身を置くスタッフ、陣野真弓であることまで把握されていたこと。

だけどその相手が、まさか私の本業のCEOだとは言い出せない。

私が常盤沙矢だと梶峰さんにバレていないので、今のところそれに関しては伏せていてもいい気がしている。

一人で考え込む私の様子に、今回のお見合いの件で落ち込んでいると解釈したらしい汰一さんは、すぐ隣に腰かけると、私の顔を覗き込んで大丈夫かと声をかけてくれる。

「それにしても、その代理の見合い相手はどうしてそんなことを調べたんだ」

「それなんですけど、車で移動しながら話したいんです。松永さんのプライバシーに関わるので」

「なんだよ、訳ありだったワケか」

「平たく言えば」

それから汰一さんの運転する車に乗って事務所に向かう道中で、私は梶峰さんから聞かされた内容を全て報告した。

「美沙希さん、どうもヤバめな女性みたいです」

「ヤバめ？」

「重度の買い物依存もですけど、かなり強烈な一面があったみたいです」

美沙希さんは金銭感覚が重度に麻痺まひしている上、恋愛依存体質らしい。それは母親である菜々子さんも同じだったそうで、畠中悠三さんと菜々子さんは愛人関係にあったのだとか。

「お母様は畠中さんとは公然の間柄だったみたいで。だけど籍は入っていませんし、聞いたまま言え、畠中さんを金ヅルだと公言してたとか」

「あー、愛人とその連れ子だったワケか」

「よく言えばそうですね」

しかし、それだけにとどまらないのが今回の話である。

「それにどうも、お見合いをすることになった切っかけが、美沙希さんの社内不倫の泥沼化らしいんです」

「なんかもう笑えないな」

「はい。聞くに耐えない話でした」

美沙希さんは勤め先の上司である樺島優樹かほしまゆうきさんとの痴情のもつれから付き纏いをしたせいでス

トーカーとして夫人に被害届を出されていて、今回なんとかして世間体せけんたいを保つために畠中さんが縁談を画策。

「なるほど。結婚を控えているからつて理由で、示談で済ませようとしたつてことか」

「ええ。ストーカーとして付き纏わないつていう、表明のつもりだったんですかね」

しかし最悪なことに、当初見合い相手に予定されていた山王隆也やまおうたかやさんは、お見合いを待たずに下心を持って美沙希さんに接触。

見た目も申し分なく、大企業に勤める山王さんに美沙希さんはすぐに入れあげたものの、美沙希さんの金銭感覚や極度の恋愛依存は、山王さんの受け入れられる範疇はんちゆうを超えていた。

「つまり畠中悠三さんが知らないところで、既に男女の中になった二人だったが上手くいかず、見合っているのが嫌でうちを利用したつてことか」

「梶峰さんのお話では、そんなところでした。だけど美沙希さんの性格的に、今でも山王さんに会いたかつたと思うんですが」

「いや、それはないだろう。彼女どうやら別に恋人がいるらしい」

「は？」

「うちの事務所に来た帰り、若い男が迎えに来ててな。事務所じゃ涙なんか見せてたが、ケラケラ笑つて楽しそうに帰つていったよ。山王は金ヅルだったのかもな」

ここまで来ると、畠中さんは娘同然の美沙希さんの自堕落じだらくを、どうにかして軌道修正したかつたのだろうと推測される。

「親の愛の空回りってことですかね」

「まあ俺たちは興信所でもなんでもないからな。代行の代金はいただいてるし」

「そうですけど」

「ブラックリストには入れさせてもらうよ。今回は問題にならずに済んだけど、事件にでも巻き込まれかねない顧客は困るからな」

汰一さんにご苦労さんと労わられて頭を大きな手のひらで撫でられながら、私は週明け本業の会社に出社して、身バレしたら厄介だなと別のことを考えていた。

うちの社風はかなりフレンドリーだ。とはいえ末端の契約社員である私のことなんて、あの多忙な梶峰さんは認識していない可能性もある。

いや、そう信じただけかもしれないけど。

「どうした、沙矢」

「いや、なんでもありません」

「そうか？」

結局汰一さんには、梶峰さんが私の勤める会社のCEOだとは報告してない。

もちろん、本当に身バレしていたら相談するつもりはあるけど、梶峰さんは私を陣野真弓としか言わなかった。

うちの会社は副業を認めているし、なんなら私は正社員ではなく契約社員だから、なおさら咎められることはないはずだ。

だけど今回の見合い相手は梶峰さん本人だった。

だからこそ、身代わりの相手が私だったとバレないで欲しいと心底願うばかりだ。



あのお見合い代行騒動の後、ビクビクしながら本業であるヘトワールプライズに出社したが、やはり末端の契約社員では梶峰さんに会うどころか、すれ違うことすらなかった。

そしてその日に限らず、次の日も、そのまた次の日も、すれ違いざまにお疲れと言うだけで、梶峰さんが常盤沙矢に気が付く気配は一切なかった。

（そりゃ、こんな私に気付くワケないよね）

だから私の中で、梶峰さんに対して完全に油断が生まれていたのは否めない。

そもそもヘトワールプライズは圧倒的に女性社員が多く、ブライダルに携わる美意識の高い華やかな顔ぶれの中で、私みたいな平庸な女は良くも悪くも目立たず埋もれていると思う。

ファストファッションの色味が少ないオフィスカジュアルに、普段からほぼすっぴんで、くせつ毛な黒髪は愛想のないローポニーでまとめるだけ。

視力は決して悪くないけれど、パソコン仕事で目が疲れるから、PC作業用のメガネをかけて、重たい前髪を下ろして左に流してある。

そんな私が、あの日の松永美沙希さんを演じた陣野真弓だと気が付くはずがない。

だからこそ私は、副業で仕事に当たる際に、当たり前前に注意を払うべきところで気を抜いてしまったのだ。

ある日、陣野真弓として参加した結婚式の二次会のダイニングバー。その時までには問題なく順調にことが運んでいたのも手伝って、すっかり緊張が緩んでいた。

「ただどこに予想外の客が訪れたのだ。」

新郎の学生時代の先輩だというその姿を視界にとらえた私は、あまりにも突然のことで気が動転して、うっかり彼とぶつかってしまった。

「失礼」

「ごめんなさい」

ぶつかり合った二人の口から同時に謝罪の声が出る。

「ただこの時、私は咄嗟とつさのことで判断ミスをした。」

「おや。どこかで聞いた声だ。これはこれは、また会ったね」

見た目ではなく私の声で気が付いたらしく、梶峰さんは感心するように私を眺めて口角を上げた。
(はあ、どうしてこうなっちゃったんだろう)

ことの発端は「オフィス・克蘭ベリー」に依頼があり、めでたく本日開催の運びとなった、依頼人ご夫婦の結婚式だ。

「美嘉さん、本当におめでとう」

「ありがとうございます！ こんな素敵なお式が挙げられるなんて、貴方のおかげよ」

ウエディングドレス姿の新婦とハグをすると、演技ではなく自然と涙が溢れる。

新婦の許田美嘉さんは児童養護施設出身で、新郎の飯田徹平さんとは仕事を介して知り合った。

美嘉さんは生い立ちから親戚やご友人などの縁が薄く、施設で過ごした頃の知人などと呼ぼうにもなかなか難しい事情を抱えていた。

徹平さんもご両親も、そんなことは気にしないと云ったそうだけど、結婚式を挙げる以上、美嘉さん側がほとんど人を呼べないことはどうしてもネックになる。

そんな時、美嘉さんは記憶にあった『人材レンタル』の利用を徹平さんに提案し、二人の結婚式で新婦の親族や友人をうちのメンバーから揃えることが決まった。

実は新婦の美嘉さんは私の古くからの知人で、彼女から相談を受けた私が、この企画を汰一さんにプレゼンしたという背景がある。

だからこそ力を注ぎ、その甲斐あって結婚式と披露宴は滞りなく終わり、二次会も問題なく進むかに見えた。

「常盤、受付はいいから、新婦さんと話しておいでよ」

「良いんですか。ありがとうございます」

事務所の先輩社員から声をかけられて、二次会の受付を交代して会場に入る。すると、新郎の徹平さんの友人と歓談する楽しそうな美嘉さんが見えて、私はホッと肩を撫で下ろす。

友人だけでなく、親戚や両親さえも「オフィス・克蘭ベリー」の社員ばかりの中で、美嘉さんが心から笑って過ごせるのか、唯一の知人としてはそこが気がかりだった。

「さーちゃ……真弓さん、みんなを紹介するから来て」

笑顔の美嘉さんに手招きされて、私は彼女の元に駆け寄った。ちなみに本名は伏せるようにお願いしているので、美嘉さんは呼び間違いを訂正して苦笑している。

私は美嘉さんの知人ではあるけれど、今回は「オフィス・クランベリィ」のスタッフとして、『親友役』でこの会場に来ている。

リアルの人々に遭遇する事態を考慮して、私はボブカットのウィッグを被り、少しキツめのメイクにマニッシュなパンツスーツ、七センチのハイヒールを履いて友人役を演じていた。

それにも拘らず、予期せぬ事態で再び相見えた梶峰さんに、私が陣野真弓だと認識されるミスを犯してしまったのだ。

しかし今更とは思いながらも、梶峰さんを見つめて悪足掻きのように、初めて会うと思いますがと切り返す。

「シラを切って逃げるつもりかな」

「……………」

今でもボイトレだって欠かさずやっている。依頼に応じて声音を変えるケースだってあるからだ。なのに私ときたら、この二次会の会場に突然現れた梶峰さんに驚いて、声音を変えることをすっかり忘れてしまったんだから、これは完全に私の落ち度だ。

見た目だけなら誤魔化せていたに違いないはずなのに、声で気付かれました。私が松永美沙希さんを演じていた陣野真弓だと。

そして陣野真弓がその仕事柄、方々^{ほうぼう}に出現するのは梶峰さんだって承知していることだろう。

「今日の名前は？ 貴方をなんてお呼びすれば良いのかな」

「失礼ながら、私は貴方に名前を呼んでいただくほど親しいつもりはありませんけど」
嫌みっぽく聞かれたけれど、皮肉たつぷりに笑って誤魔化せた。

「ホテルで密会した仲じゃないか」

「誤解を生む表現はやめてください」

「抑^{おさ}揄^うい^が甲斐^{がい}のある反応だね」

「お褒めいただき恐縮です。あいにく感情表現は得意なものですから」

「なるほど。さすがは女優さんだ」

目一杯皮肉を込めて切り返したはずなのに、梶峰さんはどこか楽しそうに、握った拳で緩んだ口元を隠している。

「馬鹿にされてるのだけは、よく分かりました」

「いやいや、褒め言葉だよ」

「とにかくぶつかってしまったのはお詫びします。では私はこれで」
その場を離れようとした私の腕を、梶峰さんの手が無遠慮に掴む。

「何も逃げなくても良いじゃないか」

「逃げ……申し訳ありませんが仕事ですので」

「へえ、仕事なのか」

愉快そうに口元に弧を描く梶峰さんの勝ち誇ったような顔を見て、しまったと思っても遅い。ついで口を滑らせて、余計なことを言ってしまった。

そもそも『人材レンタル』は守秘義務があつて、第三者にこんなことを知られてはいけないのに。「どうかした？ 顔色が悪いようだけど」

私の顔を覗き込む梶峰さんに、貴方のせいでしょうとは言えるはずもなく、片手で頭を抱えながら、お気遣いなくともう片手を上げて深呼吸する。

「ここにいらした本来の目的をお忘れですか」

「もちろん後輩の結婚を祝いに来たんだよ。だけでもっと興味を引く出来事が起きたからね」

新郎の徹平さんの学生時代の先輩にあたる梶峰さんが、二次会も終盤になつて会場へお祝いに駆け付けたことで、事態が一変するとは思わなかった。

「私なんか構つてないで、新郎にご挨拶されてきたらどうですか」

「俺は君に興味がある。是非とも話がしたい」「はい？」

「それとも、君がここへは仕事で来ると吹聴して、会場の話題作りに貢献した方が良いかな」

そんなことをされてしまつては、美嘉さんの生涯でたった一度の、せつかくの晴れの日が台無しになつてしまう。

「……話をすれば良いんですね」

「おや。俺と会話する気になつてくれたのかな」

「いいえ。脅しに屈するだけです」

「はは。なかなか一筋縄ではいかないらしい」

嫌みを返したつもりなのに梶峰さんは楽しそうに笑うと、有無を言わず私の腕を取り、新郎の徹平さんの元に向かつて歩き始める。

「ちよつと、あの」

「君という知人と偶然会つたから、会場を抜け出すには良い口実になるだろ」

「会場を抜け出すって」

「ああ、仕事中なら、君の方でも『報告』が必要になるのかな」

梶峰さんは不意に辺りを見回すと、どこかに仕事仲間がいるのかなと可笑しそうに笑つて、逃げ出さないなら構わないよと余裕たつぷりに私のことを見下ろす。

「……逃げも隠れもしません。ただ、仰る通り報告は必要なので、腕を放してもらえませんか」

このまま徹平さんや美嘉さんの前に行けば、またボロが出て私が陣野真弓ではなく常盤沙矢だとバレ、果ては梶峰さんがCEOを務める〈エトワールプライズ〉の社員であることもバレかねない。

それだけは避けたいので、報告のために電話をかけさせて欲しいと言つて梶峰さんから離れると、会場を出てすぐ汰一さんにメッセージで連絡を入れる。

梶峰さんは『人材レンタル』の大根役者である陣野真弓に興味があるようだけど、そんなに興味を持たれても困つてしまう。

どうしたものかと、汰一さんからの返事を待っていると、メッセージではなく電話が鳴った。

「もしもし」

『どうした沙矢、緊急事態って何事だよ』

「それが実は……」

私は梶峰さんとの再会や、彼が本業の会社のCEOであることを掻い摘んで説明し、今日ここに
いることが仕事だと口を滑らせてしまったことを汰一さんに謝罪する。

「ごめんなさい汰一さん。本当にバラすだとかはないと思いますが、念のためにお話に付き合うし
かなさそうでした」

『会社で気付かれたそぶりが無いからって、彼は本当にお前が社員だと気付いてないのか』

「どうでしょう。それを確認するためにも、要求を受けようと思ったんですけど」

『まあ、今はそれしか手段がないだろう。話は分かったが、変な方向に話が逸れたらまた連絡して
こい。いいな、一人で解決しようとするなよ』

「分かりました」

思いの外長くなってしまったやり取りを終えて電話を切ると、ドツと疲れが押し寄せて大きな溜
め息が出る。

本業の〈エトワールブライズ〉には、きちんと副業の申請もしてるけど、副業内容はあくまでも
事務員になってるので、陣野真弓に関してはあまり触れたくない。

梶峰さんのことで頭を悩ませていると、手に持ったままだったスマホが震えて着信を知らせた。

汰一さんが何か言い忘れたのかと画面を見て、非通知の文字に体が固くなる。

「……え」

そう言えば、梶峰さんとの代行お見合いの日もこんなことがあった。

言い知れない恐怖で震え始めた体を、不安ごと押し込めるようにギュッと自分で掻き抱くと、し
ばらく震え続けていた電話が止まった。

(こんな短期間に二回も？ ただのかけ間違いと思っていいのかな)

思い当たることが全くない訳じゃないのが余計に不安を掻き立てて、額に脂汗が滲んでくる。

「そこにいたのか」

「いやっ！」

背後から不意に声をかけられて、恐怖から身を守るように蹲る。すると、一体どうしたのかと
焦った様子で人影が隣にしゃがみ込んだ。

ふわりと漂うラベンダーのようなフゼアノートの匂いは、ついさっきまでそばにいた人の香り。

「陣野さん、何かあったのか」

気遣うように顔を覗き込まれ相手が梶峰さんだと分かると、今度は自分の取った行動を思い返し
て、羞恥心で顔を上げられなくなる。

「やだ私、本当にごめんなさい」

「大丈夫なのかな」

「はい。なんでもありません」

はぐらかすように苦笑しながら立ち上がると、急に立ち上がったせいか貧血のようにくらりと

眩暈がしてバランスを崩す。

「おっと」

不意に逞しい腕に抱き留められて、爽やかなのにスパイシーなフレグランスの香りが一層濃くなった。不用意に触れられたにも拘らず、おかしなことに安堵感があって自分の心境に驚く。(なんで落ち着くんだろう。見知った人だから?)

探るように梶峰さんを見つめていたけど、気まずそうな咳払いに我に返ってハッとす。

「すみません」

「君は謝ってばかりだな」

眉尻を下げる梶峰さんと再び目が合って、思いの外近すぎる距離は、その腕の中に抱き締められているからだともうやく理解した。

(綺麗で華があるって、こういう顔のことだろうな)

ぼんやり思ってから、ついうっとり見つめたままであることに気付いて慌てて目を伏せる。

「顔色が悪いね。突然声をかけて驚かせて申し訳なかった」

私を気遣うように、もう平気かなとゆっくり腕を離すと、梶峰さんは改めて私の顔を覗き込む。

「平気です。もう大丈夫なので」

陣野真弓として演じる新婦の友人の顔に戻ると、賑やかに盛り上がる会場を振り返りながら、お祝い事だどこちまで浮かれますよねと誤魔化した。

だつてどう考えても、声をかけられた瞬間に叫びながら蹲るのは異様だ。絶対変に思われてい

るだろうから、出来ればもうその話題には触れられたくない。

「そうだね。浮かれて食べすぎたことにおこうか。俺がこれ以上、過度に心配しても鬱陶しいだろうからね」

梶峰さんは暗に何も聞くつもりはないと言いたいのか、揶揄うような笑みを浮かべて、私の行動には深入りしてこなかった。

「なんで食べすぎなんですか。お酒をいただきすぎただけですよ」

「へえ。じゃあそういうことにおいてあげるよ」

「嫌な言い方しますね」

こんなたわいないやり取りをしていると、私は自分の中に生まれた違和感に気づいた。

会社での印象もそうだけど、梶峰さんはお見合い代行で対峙した時とは別人みたいに優しい。

もしかしてあの時に非情なほど冷淡な印象だったのは、別に私を馬鹿にしていた訳じゃなくて、代行を頼んだ依頼人に嫌悪感を持っていただけなんだろうか。

「ところで、君の方の『報告』は終わったのかな」

「ええ。お時間をいただいてすみません」

「そうか。では場所を移動して、と思ったんだけど、今日のところはやめておくことにするよ」
梶峰さんはそう言うと、申し訳ないと難しい顔をして頭を下げた。

そもそも私を誘ったのは彼の方なのに、一体どういった心境の変化だろう。それとも冗談半分の軽いお誘いだったのだろうか。

「どういうことですか」

「あれ？もしかして楽しみにしてくれたのかな」

「いや、あのですね」

「冗談だよ。申し訳ないんだが、実は人と会う予定が急に入ってしまったね」

「そうだったんですか」

「がっかりしたかな」

「まさか」

余裕たつぷりで可笑しそうに肩を揺らす梶峰さんに、願ってもないことですよと意地悪く笑って返す。

すると梶峰さんは少し真面目な表情をして、本当のところはねと私の顔を覗き込んだ。

「君は顔色も良くないし、また別の機会にゆっくり話を聞かせてくれないかな」

そう言って私の手を取ると、不意に漂うフゼアノートの香り。

いつ用意していたのか、私の手に名刺を握らせて、梶峰さんは「裏に個人の連絡先を書き込んである」と意味深に口角を上げる。

「連絡待ってるよ」

「私がわざわざ貴方に連絡すると思いますか」

「つれないな。だけど女性に連絡先を聞くのは失礼だからね。今の俺にはこうすることしか出来ない」

「じゃあ連絡しなければ、今後は会うこともないですね」

「そういうことになるね」

梶峰さんは可笑しそうに喉を鳴らすと、ちらりと腕時計を見てそろそろ失礼するよと言った。

「自分から声をかけておいて、今夜は本当に申し訳ない」

「いえ。私にとっては好都合ですので」

皮肉たつぷりに答えると、本当に時間がないらしい梶峰さんは、それは残念だなと笑いながら、それでも待つてるからと一言呟いて、その場を離れて店の出入り口に向かう。

その後ろ姿は、私がCEOとして知っているものとも、お見合いの代行の時に見たものとも違って、とても優しい気配を纏っていた。



陣野真弓として梶峰さんに再会してから二週間。

連絡先の書き込まれた名刺は受け取ったけれど、もちろん私から連絡することはなかったし、この先も連絡しないで済むならそうしていただろう。

「常盤さん。これコピー六部じゃなくて、六パターンを三部ずつでお願いしたんだけど。どうかしたの、顔色良くないけど調子悪いの」

「あ、すみません。すぐにやり直してきます」

先輩社員の吉田さんの声にハッと我に返った。

すぐに資料を持ってコピー機のあるスペースに移動すると、指示通りに書類をセッティングし直しながら堪らず息を吐き出す。

あの結婚式の日、私は陣野真弓ではなく、常盤沙矢としてへエトワールブライズ」に出勤して、いつも通り仕事に取り組み、CEOの梶峰さんとも何度もすれ違った。

けれど彼が本当の私に気付くことはなく、やはり『人材レンタル』の役者である陣野真弓に対して、何か話があったんだと結論づけることにした。

事情があつて『人材レンタル』という仕事に興味があるのか、それは梶峰さんと話してみないと分からないけれど、とにかく平凡な契約社員の常盤沙矢には一切関係ないことだ。

そんな風に安心していたのも束の間、今朝アクシデントがあつた結果、突然、梶峰さんから呼び出しを食らってしまったのだ。

『随分と擬態が巧いな、君は』

感心したように呟いて私を凝視する梶峰さんの顔が頭から離れない。

私が陣野真弓だとバレってしまった理由は、朝礼でのスピーチだった。

案の定、私の拙いスピーチの内容よりも、その声に興味があったのか、CEOの部屋のドアにもたれかかって、面白そうに口元に弧を描いていた梶峰さんの顔を思い出す。

そうなのだ。ここでもやはり私は声のせいだ、大根役者へオフィス・克蘭ベリイ」のレンタル俳優である陣野真弓だと気付かれてしまったのだ。

コピーした資料を手に吉田さんの元に向かうと、業務の確認をしてから一言断りを入れて、気分転換に窓際のデスクに移動した。

フリーアドレスは、こんな時にはありがたい。

(はあ、気が重いな)

データを拾いつつ頼まれた資料を作りながら、すっかり冷めてしまったコーヒーを飲んでいると、背後から突然現れた梶峰さんに声をかけられた。

「常盤さんは上の空かな」

「……お疲れ様です」

「俺と食事するのがそんなに不服かな」

「不服とかそんなこと以前に、契約社員の私がCEOとご一緒するなんて恐れ多くて」

気が重く、胃まで痛む原因はこれだ。

「俺がそんなに苦手なのかな、陣野真弓さん」

「ちよつ、その名前は職場ではやめ……てくだささい」

屈んで耳元に囁いてきた梶峰さんの方を振り返ると、思いの外顔が近くて、動揺して一気に頬が熱くなってしまう。

「とにかく、あちらの仕事でしたら事務所を通してくださらないとお受け出来ません」

「見合いたした仲じゃないか」

「あのですね」

「約束しただろ。仕事が終わったら食事に行こう。逃げるなよ、常盤沙矢さん」

これは偽名じゃないよな。そう言ってるポーンと肩を叩いて微笑む姿は、ハタから見れば従業員を労働スマートなCEOに映っているのかもしれない。

だけど私にとっては、悪魔にしか見えない恐ろしい存在だ。

梶峰さんが離れていくと、何人かに興味本位で話を聞かれたりしたが、そこは嘘と真実を絶妙に交ぜながら返答していく。

独身での顔立ちと華やかな経歴、確固たる地位を持つ梶峰さんは、主に女性社員から絶大な人気を誇る人だ。

「ああ、本当に気が重い」

終業まではあと少し。大きな溜め息を吐き出して、私は再びキーボードを叩き始める。

そもそも私が勤める〈エトワールブライズ〉は、ウェディングプランナーやドレスコーディネーターはもちろん、婚活支援で活躍するマッチングコーディネーターも多く抱えるブライダル企業。

もちろん管理部門もある訳で、私の仕事は花形部署のプランナーや、コーディネーターのサポート事務。いわゆる裏方だ。

「常盤さん、遠藤様と山岡様ご夫婦のフォトセッションの資料、ちよつとテコ入れするかもしれないから明日にはちようだいね」

「その件でしたらチャットメモ残しましたが、先ほどメールお送りしているのでチェックお願いします。あ、十七時過ぎのメールです。松嶋チーフにもccで送信してます」

「ありがとう！ 助かる」

退勤時間が迫ると、こんな風にバタバタすることはしょっちゅうある。

(この忙しさに紛れてしれつと帰りたい)

そう思ってるガラス張りになったCEOの部屋へチャリと視線を向けると、あろうことかこちらを見つめる梶峰さん本人と目が合ってしまった。

目が合った瞬間から、梶峰さんは何かを伝えるように口元を大袈裟に動かしているものの、この席からは遠くてさっぱり分からない。

何度か繰り返し返してくれる梶峰さんには悪いけど、困惑しながらペコッと頭だけ下げて視線を戻した。

そしてキーボードを叩き始めてしばらくすると、社内チャットが届き、通知を確認したら差出人が梶峰さんでゲンナリする。

ポップアップをクリックしてメッセージを開くと、少し冷やかな内容が表示された。

【逃げるなよ、と言ったんだ。どさくさ紛れに帰ろうとか思ってるんじゃないだろうね】

ハッとしてCEOの部屋を振り返ろうとするけど、あまり目立つことはしたくない。

(バレてる。撒いて帰ろうとしてる思考を読まれてる)

動揺したまま、なんと返事をするべきか悩んでいると、新たにメッセージが届く。

【仕事が終わったら地下駐車場に。正面玄関から逃げても無駄なので必ず来るように】

釘を刺す言葉に、私なんかでは太刀打ち出来る相手じゃないことを悟る。

だからいよいよ腹を括^くって、分かりましたとチャットで短い返事をする、コーヒーマグのカップを片付けるために席を立ち上がり、手にしたスマホで短いメッセージを打つ。

もちろん相手は「オフィス・克蘭ベリイ」の社長である汰一さんだ。

梶峰さんに身バレし、ご飯に誘われてしまった。

しかも事実は分からないけど、この大根役者に一芝居打たせようとしている可能性もある。

万が一にもそういう依頼なら、本当に事務所を通してもらわないと困るのだ。

いよいよ頭痛がしてきて頭を抱え、既読もつかず返事もないスマホを握り締めて溜め息を吐く。

席に戻って伝票チェックをしつつデータ入力をして、それが終わると経理の担当者のデスクまで

伝票を届けに行く。

残念ながらこれで本日の業務は終わりだ。

憂鬱^{ゆううつ}な気持ちで帰り支度を整えて、何気なくCEOの部屋を振り返ると、またも目が合った挙げ句に『に、げ、る、な、よ』と、微笑みながら口パクで念を押されてしまった。

本当に私ときたら、あの二次会の時に学んだはずなのに、どうして同じように声を意識し忘れてしまったんだろうか。

喉を押さえて唸^{うな}る。本当に役者として使い物にならない自分に嫌気が差す。

仕事を終えて、パウダールームでよれたメイクを直し、溜め息が出そうになるのを我慢しながらメイクポーチの中身を整理して気持ちを落ち着ける。

今になって後悔しても仕方ないことだけど、仕事として、こんな初歩的なミスを犯したのは非常

にマズい。汰一さんに絶対怒られる。今はそれで胃が痛い。

社長といえど、汰一さんはマネージャー業務も兼任している。

この時間になってもメッセージが既読にならないということは、多分役者の現場同行でスマホを機内モードに設定している可能性が高い。

けれど仕事の連絡も入るため、こまめに通知は確認するはず。

出来れば梶峰さんと出かける前に、汰一さんとコンタクトを取りたかったが、時間がないのでそのまま地下駐車場に降りた。

車通勤が認められているため、自社ビルの地下駐車場は、それなりの数の車で埋められている。

(CEOの車種、聞くの忘れちゃったな)

ぼんやりとそんなことを考えていると、一台のド派手なグランドツアラーが目に入る。

どんな顔したやつが乗ってるのかと毒づいていたら、こんな顔だけだと背後から声をかけられた。

「びっくりした！ 梶峰CEO」

「お待たせしたかな。結構大きな声で独り言を言うんだな」

「え、私声に出してましたか」

「そうだね、気分悪そうな声だったよ」

笑うのを堪^こえている梶峰さんの様子は、それだけで私に優しい印象を与えるには充分だった。

「さて。こんな車だけど、乗り心地は悪くないよ」

エスコートされて助手席に乗り込むと、革張りのシートはいかにも高級で、広々とした空間が外観

とは異なる印象を与えた。

「それじゃあ行こうか」

ゆつくりとした丁寧な運転で駐車場を出ると、梶峰さんが運転するメタリックブロンズの車体が、夜の街を走り抜ける。

「さて、ちよつと面白いところに行こうか」

「面白いところ、ですか」

「その前に少し買い物してもいいかな」

「ええ、大丈夫ですけど」

梶峰さんは宣言通り途中でショッピングモールに立ち寄ると、併設されたスーパーマーケットで、私に好みを聞きながら食材や調味料を買い込んだ。

なぜここで食料品をかうのか疑問に思いつつも、買ったばかりの商品を袋に詰めて、周りにはカッパルに見えてるのかなとふざける梶峰さんを窘める。

そして着替えが必要になるからと、私と一緒にファストファッションのテナントをいくつか回り、二人分の下着を含めた着替えを一式買い揃えた。

「結構な荷物になりましたね」

「思い付きで行くことにしたから、そうなる結構入り用になるもんだね」

梶峰さんはクスツツと笑って、重いだろうからと私の荷物をさりげなく回収して自分の肩にかけてしまう。

モテる男はこういうことをサラツとこなすよなど、汰一さんを思い出して、そういえば返信が来ないかどうか気になった。

「すみません、ちよつと連絡が来てるかもしれないのでスマホを触っても構いませんか」

「構いませぬよ。そんなのわざわざ聞かなくてもいいのに、随分律儀だね」

「この状況が信じられませんが、梶峰CEOはうちのトップですし」

「今はプライベートだから、その手の気遣いはしなくていいよ。無理に誘った自覚もあるしね」

そう言うと、梶峰さんは休憩スペースに向かい、ベンチに座るように私を呼び寄せて、気を遣わせないためか自分もスマホを取り出した。

バッグからスマホを取り出すと、着信が一件と、メッセージアプリの通知が二件。どちらも汰一さんからだ。

この場で電話をかけ直す訳にはいかないので、取り急ぎアプリを開いて、汰一さんから届いたメッセージを確認する。

【了解。状況は把握した】

【依頼なら後日俺も交えて話を聞くと行って、絶対にその場で了承しないこと。プライベートで口説かれるなら、頑張れよ(笑)】

怒られるかと思いきや揶揄うようなメッセージが届いてて拍子抜けするも、梶峰さんを待たせてもいいけないので、短く了解の返事を打つ。

「お待たせしてしまってすみません。私の方は終わりました」

「本当？ ごめん。二、三分ほど待っててもらえるかな」

「ならあのカフェでコーヒーでも買ってきます。好きなものがあれば伺います」

「甘いものも平気だから、君と同じで構わないよ。はいこれ」

さりげなく渡されたので、カフェのプリペイドカードかと思いきや、会計の時にそれが梶峰さんのクレジットカードだと気付いてかなり焦った。

当然のようにブラックカード。ハイスタータスなご身分の人はやっぱり生きている世界線が違う。ベンチに戻ろうとカフェを出ると、可愛らしい女性二人組に話しかけられ笑顔で対応する梶峰さんが見えた。

最近じゃ女性誌にも出ているし、本当に有名人なんだなと傍観していたら、私を見つけた梶峰さんが、今までは違って蕩けるように破顔して私に手を振る。

(なんて甘い顔で笑いかけるんですか!!)

その表情はあまりにも無防備で、梶峰さんを男性として意識したことがなかった私への破壊力は抜群だ。

案の定、梶峰さんに詰め寄っていた女の子たちが不審そうに私を見つめている。

「じゃあ、彼女が来たから失礼しますね」

梶峰さんは意味深に微笑むと、カップを取り上げて私の手を恋人繋ぎで握り締め、何事もなかったかのように歩き始めた。

「ナンパされたんですか」

「こんなオジサンを？ まさか。俺のファンなんだってさ」

駐車場場で車に乗り込み、たわいないやり取りをする。

「でも意外でした。梶峰CEOでもスパーマーケットとかに行くんですね」

「俺をなんだと思ってるの」

「神の寵児？ とかですかね」

「なんだそれ、初めて言われたよ」

世間話をしながら更に一時間ほど走ると、海が見える場所までやって来た。

会社を出るまではあれほど苦痛で仕方なかったのに、初めて一緒に出かける、しかも会社のトップと同席してる割には、案外楽しくあつという間に時間が過ぎていく。

「もうすぐ目的地」

「面白いところって海ですか」

「海は嫌いだったかな」

「夏は苦手ですけど、海は嫌いじゃないですよ」

窓の外に見える仄暗い海を眺めつつ、夜の海ってちょっと怖いですねと子どもみたいな言葉しか出さない自分が恥ずかしくなった。

「どうして夏は駄目なのか聞いてもいいかな」

「大した理由じゃないですよ。私、低体温なので夏は頭がポーツとしやすく。病院に行っても低体温とは関係ないって言われるんですけど、本当に怠さが酷くて」